従軍体験

従軍体験

高瀬梅吉
鷺宮四丁目

二度目の召集で第十六軍司令部副官部に所属。麻布の東部八部隊に宿泊。青山の陸軍大学校で出発準備をし、昭和十六年十二月二八日陸大出発。三十日大阪港出帆。玄界灘を元日に通過。ほとんど船酔いで食欲なく青ざめていた。

高雄に一月八日上陸。気温よく現地人がパパイヤとバナナを売りに来た。一房二十数本が七〇銭と安かったので二房買って食べたら下痢をした。

治集団集結

第十六軍は今村均中将司令官、満州（中国東北部）方面から高雄に集結。この船が水を積み込むので高雄の水道は十日ほど出なかった。私ども司令部要員の宿泊は温泉つきの保養所で、一月なのに砂浜は暑く、泳いだり温泉プールに浸るテンホーな気分だが、水泳は懸命にやらされた。

勉強は、法務官が「日中戦争が未だに続いている理由の一つは、兵の無謀な行為が住民の反感をかって敵は終戦に応じないのだ。我々はいかに戦に勝っても民心を掌握できなければ戦勝の成果はない。皇軍の品位を忘れるな」と、いろいろ実例をまじえ強く教えられた。治集団は高雄を出帆、途中カムラン湾で集結完了。

輸送船八〇隻、護衛の駆逐艦潜水艦二〇隻、兵力十万人の堂々たる船団を歌った唄

治集団東印度艦艇の唄

南十字星の星を見て　波を蹴破る幾夜さぞ
遠く御世やを開かせし　海原進む我が軍の
威風南をおおいたり　皇軍（すめらみこと）の行くところ
御威（みい）づ輝くスメル山　山の草木もひれ伏して
今蘇るむこの民　たてよ南の同胞（はらから）よ
我と挙（こぞ）りて打ち立てん　新しき世のこの楽土

敵前上陸

昭和十七年三月一日治集団は東部、中部、西部の三方面から敵前上陸強行。司令部要員の乗っている桜丸、龍城丸、あきつ丸等数隻は、バンタム湾の海戦で魚雷攻撃され沈没。海面に浮

いた油の海を泳ぎ、暁部隊の小舟に助けられ上陸。今村閣下もシャツ一枚で泳いでいるのを暁部隊の兵に気合をかけられ引き上げられ話の種となる。

戦闘はわずか七日、それもほとんど抵抗なくバンドンに逃げて行き、敵の軍使は白旗を掲げ降伏して来たが、バンドンに集結したからここを除いてくれと条件付降伏だ。今村司令部は無条件降伏を要求し、バンドン総攻撃体制を配備。カリジヤテイ会見で、「ノー」か「イエス」かで無条件降伏す。昭和十七年三月九日だ。上陸地からバタビヤ（現在のジャカルタ）に向かう道路の太い並木に穴が開けてある。敵は爆薬を仕掛け日本軍の進撃を妨害する作戦だったが、日本軍の急進撃で爆破する暇がなく逃げた。接収した車にガソリンを補給した。走行中は良いがしばらく停車して始動するとエンジンがかからない。敵が松ヤニを入れたため気化器のポンプが動かないのだ。

敵連合軍捕虜は各収容所に分散し、オランダ軍と婦女子は別に収容した。

今村軍司令官に随行

軍司令官の護衛車操縦士でジャワ全島を視察随行。閣下の車のすぐ後を走る。憲兵が側に、後方に狙撃兵、軽機関銃兵、指揮の将校が乗り込む。沿道至る所で日の丸の小旗を手にニッポーン、ニッポーンの大歓迎。捕虜収容所の前では、連合軍の捕虜が整列している前を車のスピードを落とし、閣下が挙手の礼をして通過。視察ホテルの前などは黒山の人の波。戦勝国の誇り高き気分を噛みしめ最高の感激だ。

バタビヤ捕虜収容所本部

バタビヤ捕虜収容所本部に自動車担当で勤務した。バタビヤには収容所が五か所あり、人数は一か所二千名から二千五百名。私の仕事は、各収容所に肉や魚を、午後はマンダレー駅ホームに到着した野菜を運搬するトラックの指揮官。入荷量を収容所の人数に応じて下士官が配分し、トラック数台に積み込む。作業や車の運転は捕虜がやり、日本軍は小銃を持った兵が五名づつ先頭と後尾の車に乗る。私の宿舎はオランダ軍司令官や高級将校の営内で、朝な夕なに散歩やバトミントンで体力保持に熱心な姿が見られた。

十六軍司令部編成替

今村閣下は、日本軍の戦力は出し尽くしたから、この辺で停戦すべきだとの意見。参謀部の将校が我々の待機所に遊びにきて、「君達遠からず内地に還れるから無駄遣いせず、ワニ皮のハンドバックを買っておけ」などと談笑した。大本営と意見を異にし、今村閣下は内地に呼び戻された。私は独立守備歩兵第五三大隊第二中隊に転属。大隊本部の兵器係を命ぜられた。部隊はバタビヤからスマランに移動を命ぜられ、各中隊分散警備についた。

ボゴールの幹部教育隊勤務

インドネシアの青年を日本の士官学校に習って将校要員として養成するのだ。教育隊長は中野学校出身の柳川宗成大尉。四〇名編成で四区隊別に大団長、中団長、要員一区隊。教育は厳しく、親日派でジャワの防衛が義務づけられる。これが現在の独立インドネシアの基礎になっている。

「教育は人なり熱なり」、起床と同時に上半身裸で営門を飛び出し、隣の広場に整列。教育隊長の号令で皇居遙拝をして訓示が終わると、班長の指導で教練を三〇分ほどして隊に帰る。朝食後午前中は演習、午後は学科。彼等は将来の独立を夢みて熱心であり、青年は国の花であると誇りをもっていた。現大統領スハルト氏も入っていた。

この学校に入ったことは大変な人気で、一人の生徒に数人のチンター（恋人）が面会に来る状態で、我々教官は度々会食に招待された。教育隊を修了すると各州に帰り、五〇〇名単位の防衛義勇軍大団を創設。日本軍は将校一名下士官五名で指導する。通訳が一人づつ配属され、私はケドー州マゲラン大団で、通訳は十八歳のスカルノ君だ。

敗戦所感

指導官から原隊に戻り、兵器係となった。昭和二〇年八月十五日、予定通りスラバヤの師団司令部に兵器受領のためソピール（インドネシアの運転手）に運転させ、ジョクジャカルタを出発。スラバヤの指令部に到着後兵器室に顔を出すと、もう証票など不要。「欲しいだけ倉庫に行って積んで行け」平常と全く違う。司令部雇員のインドネシア人には、給料二か月分と白布一反を退職金として持たせ解散中だ。昼食は司令部でせよ。赤道を遙かに越えたスラバヤで天皇の玉音を聞き、張り詰めていた心に異様な不安を感じた。本土決戦をせず、耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで日本民族の最後の一線を守るためと感じた。

トラックに部品と手入用反物を沢山積んで、「帰ります」と挨拶すると、「気をつけて帰れ」と注意されたが、その意味など気にせず、いつもの通り中国人の店に入る。店主が「トアン（私のこと）、ギルダーあるか」「ノー」と答える。「日本戦争敗けた、軍票ダメ」ときた。「畜生」と思ったが仕方ない。別の中華店に入ったが同じ態度。仕方ない、パッサル（常設市場）でパパイヤとバナナを買いにやり、反物と交換して食べながら帰った。終戦を知るやインドネシアは独立を宣言。行動中の日本軍の銃剣類を強奪。抵抗するが多数のインドネシア人が竹槍で向かってくる。走行中のトラックには、道路に障害物を置き、停車すると積荷をポンポン放り出して掠奪だ。ムルテガ（独立）活動はこうした展開だ。私は何の妨害もなく隊に帰れた。終戦後の生活は不安と流言飛語で怒る者、自殺する者、脱走する者等で、点呼のたびに人員が足りない。

トラックのエンジンをかけるため、私がジープで村井君のト

ラックを牽引して営門を出ると、ムルテガ連中が集団でトラックをくれと来た。マレー語と日本語で話したが彼等は聞き入れず、怒った村井君がクランクハンドルを持ち出してきた。彼等はピストルを向けて一〇〇人ほどの集団で武器を持っている。私は村井君を制止して彼等の頭目に話した。「独立する君達の気持ちはよく分かる。俺はボゴールで君等の幹部を教育した教官だ。インドネシアの独立を助ける兄弟ではないか」と説得し、了解してことは収まり、彼等はスダラ（兄弟）スダラと言って引き揚げた。

ジョクジャカルタの憲兵隊攻撃さる

我々の近くの憲兵隊が包囲され、近くの民家を立ち退かせ攻防戦が続いた。私達は銃火器を取り出し助けに行こうとしたが、間瀬部隊長の厳命で果たせず、憲兵隊は弾丸を射ち尽くし降伏。勝ち誇った彼等は、私達を上半身裸にしてジョクシャの街を行進させ、刑務所に収容した。

ジョクジャカルタからメランピ山麓に移動。英軍マウンドバッテンの電信の指示通り、武器弾薬を集結完了。自活の生活に移り、農作業で夢も希望もない生活をしていた。

祖国に還れそうな日

昭和二一年五月十日、バロスを後にテガール港へ装具を背負い歩いていたら、後方から班長殿、班長殿と声がかかる。見ると私がボゴールで教育したスヂヨノ君。インドネシア最高指令部から我々の部隊の輸送指揮官として派遣されたと申し、お体を大切にお国にお還り下さいと親しみを込めた日本語で話しかけ、教育隊のこと、独立した現状など夢多き未来を彼は自信に満ちた笑顔で話してくれた。

私の青春は、アジアの国をアジア人の手で取り返した、民族の歴史に残る事業に参加した一人として誇りに思っている。